

Title	国語問答 ホアン・デ・バルデス(翻訳-4)
Author(s)	Valdés, Juan de; 中岡, 省治
Citation	大阪外国語大学学報. 56 p.89-p.105
Issue Date	1982-03-10
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80885">https://hdl.handle.net/11094/80885</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 国語問答

## ホアン・デ・バルデス(翻訳— 4 )

中 岡 省 治

A continuación aparece una traducción parcial del *Diálogo de la lengua* compilado por Juan de Valdés en 1535 en Nápoles y publicado por el egregio lingüista Mayans y Siscar por primera vez en España en 1777.

Parte de la obra también traducida que precede a la presente fue publicada en el Journal of Osaka University of Foreign Studies, ediciones 1972 y 1975, y la revista Estudios Hispánicos edición 1980.

過去 3 回 (大阪外国語大学学報第30号及び36号 ; Estudios Hispánicos 第 7 号) に Juan de Valdés 著, *Diálogo de la lengua* の一部訳出をおこなったが、以下はその続きである。

この翻訳には、Juan de Valdés, *Diálogo de la lengua*, edición y notas de José F. Montesinos, Clásicos Castellanos, No. 86 (Madrid, 1953) を底本として用い、その他、Juan de Valdés, *Diálogo de la lengua*, Clásicos Ebro, No. 18 (Selección, estudio y notas por Rafael Lapesa, Zaragoza, 1965) ; Juan de Valdés, *Diálogo de la lengua*, Clásicos Castalia, No. 11 (Edición, introducción y notas de Juan M. Lope Blanch, Madrid, 1969) , J. de Valdés, *Diálogo de la lengua*, Biblioteca Clásica Universal, No. 12 (Prólogo y notas de Felix F. Corso, Buenos Aires, 1940) を適時参照した。

この言語問答には Valdés と他の三人、Marcio, Pacheco, Coriolano とが参加するが、これら問答者は訳文では夫々の頭文字で示している。なお、この訳出部分は、上記テキストの83ページ22行目から107ページ5行目までに該当する。

M. 字母 p と b の直前では m と n のいずれを使うべきか、この点あなた様のご意見をお聞かせ下さいませんか。

V. 私として確実に言えることは、その問題については、今後ともあまり頑迷な態度を取ることはなかろうということです。言うまでもなくはっきり分かっていることですが、その場合ラテン語では m が好んで用いられましたし、これはこれで正しいことだと思えるのですが、しかし私、この m を n としか発音しないものですから、この点で私は少しずばらをさせてもらい、双方に敬意を表して、時には m を書き、また時には n を書くことにしています。したがって、《Duro es el alcacer para çampoñas》<sup>(註1)</sup>と書いたり、また para çanpoñas と書いたりしているのです。同じことで、《A pan de quinze días, hanbre de tres semanas》<sup>(註2)</sup>とすることもあれば、hambre とす

ることもあるのですよ。

M. そうではあっても、あなた様は n よりも m を使う方がいいとお考えですね。

V. そうです、あなたの言う通りです。

M. あなた様が estonces, assí, desde と書かれているところに, entonces, ansí, dende と書いて夫々 s を n に変えてしまう人々があります。あなた様が n よりも s を選ばれるのは何が大きな理由があつてのことでしょうか。

V. 私の挙げうる第一の理由としては正しく書き綴る人々の慣用ということです。私は単語夫々の語源に則って説明をしてもいいのですが、この語源といった複雑な話題に入り込みたくないものでしてね...ですから、皆さん方、今のところ、あなたの挙げたそれら単語では n よりも s を使うのがいいのだということと、その n は不注意からそれらの単語中に入り込んだと私が考えていることを知ってもらえば十分ですよ。<sup>(註3)</sup>

P. この私もそれと同じ意見ですね、但し、かつて estonces よりも entonces とする方がいいと思えたこともありましたが、そのお話で私にもはっきりと分かりました。

M. 次の 2 単語 invierno と lenxos ではあなたは n を取り去って ivierno と lexos とされますがこれは何故ですか。わざとそうされるのか、それともうっかりとしておられたのでしょうか。<sup>(註4)</sup>

V. 私思うのですが、うっかりしているのは何の理由もなく n を書く人たちの方ですよ。というのは、この n は私の考えるところ、不注意からいくつかの単語の中にまぎれ込んでしまった字母なのですからね。

M. 私もおそらくそうじゃないかと思っています。しかし, esfera はギリシア語であり、ギリシア語が ph を使っているのに何故あなた様はそれを f で書かれ、他の人は p を使うということになるのでしょうか。

V. その p で書いている人たちが、自分たちのことについての説明をすればいいのです。私としては f を使うのはこの字母が発音とぴったり一致すると思うからなのです。

M. すると、その他のギリシア語から来てラテン語が ph を用いているような単語、例えば philosophia とか phariseo のような場合にもまったく同じことをされるのですか。<sup>(註5)</sup>

V. ええそうです、前とまったく同じ理由からね。

M. 私は guerra や tierra, またこれ以外のもので、2 個の r で書くことになっている単語が、まるで 1 個の r しかないように発音されるのを聞くことがあります。こんな発音をするのはいい恰好をするためなのか、それとも無知からなのか何度も考えてみたのですが、この点につきお考えお聞かせ下さいませんか。

V. よく見せようと思ってそうするのでもまた無知からそうするのでもないものでして、それはそう発音する人の自国語が及ぼす作用のせいなのです。つまりそういう言語は r が 2 個重なって出すあの激しい音声を発音出来ないのですからね。

M. Querido と quesido とではどちらがいいとお考えですか。

V. 私は *quesido* とは書かず、常に *querido* とします。というのは元々 *querer* から出ているのですから。

M. 分かりました。さて、これまで私の見たところによりますと、多くの単語であなたが2個の *s* で書いておられるところを、他の人は1個の *s* で済ませていますし、また他の人が2個を用いているのにあなたは1個しか使っておられない場合もあるのです。この *s* の使い方に何かの規則を決めておられますか。

V. その問題に関し私自身決めている最も一般的な規則は、*bonísimo*, *prudentísimo* のような最上級の名詞の場合は全部、*huessa*, *condessa*, *abadessa* のように *essa* で終る名詞全部、*interesse* のように *esse* で終る語の場合、とくにこれは *hiziesse*, *truxesse*, *llevasse* などのように多くの動詞の活用がこの活用語尾で終わっているのですが、こういった場合、それに *hueso*, *professo*, *traviesso* のように *esso* で終る場合などに *s* を重ねることにしています。つまり一般的には発音が声を伴わない時には2個の *s* を書き、そうでない場合に1個の *s* とするのです。<sup>(注6)</sup>

M. その規則私には結構なものと思えます。さてと、*asperar* と *esperar* との間にも何らかの区別をされていますね、そのところをお聞かせ下さい。

V. そうです、私は *asperad* は確実なことに、*esperad* は不確実なことに關し使うことにしていますが、これはあなた方イタリア人が *aspettar* と *sperar* とを使い分けるのと同じことなのです。したがって、《*Aspero que se haga hora de comer.*》と《*Espero que este año no aurá guerra.*》と言うことになります。私の知る限りほとんど誰もこの差を厳密に尊重しないのですが、私の意図することをより正確に伝えるためには、この意味上の差を区別して使うのがいいと私には思えるのですよ。<sup>(注7)</sup>

P. 私はこれまでそんな区別をしたことはないし、また誰かがそんな区別を設けているのを見たこともありません。

M. いやいや、パチエコ君、驚くことはありませんよ、例のイタリア語の二つの単語の場合でさえ皆区別をして使っている訳ではないのですからね。その差が分かる人たちがその区分をしつかりと守っていくのは当然のことですが、それと同様、このイスパニア語の2単語についても意味上ははっきり区別をしておくのがいいのではないかと私は思うのです。したがって、読む側の問題として *esperar*, *asperar*, *confiar* の意味をどう理解すべきかということが生じてくるのですが、特にこの三つの単語というのはいつも物を書く人を悩ませるものなのでしてね...さて、この問題をはっきりと説明していただきましたので、次には *t* を書かずに *cien* とするのがいいのか、それとも *t* を書いて *cient* とするのがいいのか、私達にお話し下さい。

V. これまで私はどちらをよしとすべきか決めかねていたような状態ですが、私は最終的には *t* なしで書いて、《*Un padre para cien hijos, y no cien hijos para un padre*》<sup>(注8)</sup> のようにしようと考えています。

M. 2個の *f* の取扱いについてあなたが私にこうすると約束下さったことがあります、それ

を *affetto, dotto, perfetto, rispetto* のようなラテン語で 2 個の *t* または *ct* で書いた単語の場合にも適用すると私にお約束下さいませんか。

V. それは 2 個の *f* の取扱いの場合よりも少し無理な注文ですが、それ自体、結構なことでもありますので、私は頭からそれを断わってしまいたくありませんね。<sup>(註9)</sup>

M. そのお言葉有難く感謝いたします。さて次に、いくつかの単語では多くの人たちが *t* を使ったり、また *d* を使ったりで統一のない場合がありますが、これをどのようにお考えですか。

V. そのようにひとつの単語で綴りが一定しないのはよくないと思いますが、あなたのいう単語はどんなものか教えてくださいよ。

M. *duro* と *turo*, *tresquilar* と *desquilar* のような場合です。

C. 君なにを言っているのです、*turo* と *duro* とは同じものではないのが分からないのですか。<sup>(註10)</sup>

M. そうでしょうか。

C. こういうのはね、私の聞いたところでは *turo* は *durauit* を意味し、*duro* は比喩的には、*escasso* (けち) の意味になるのですからね。というのは、一文無しやしみったれた人からは石をしばって出るぐらいの汁しか出ないということで、こんな意味が生まれたのでしょうか…。<sup>(註11)</sup>

V. その点については、あなたはもっと大きな間違いをしていますよ、というのはあなたの言ったように *escasso* を意味するときで、アクセントを *u* において *duro* となる場合、例えば、《*Más da el duro que el desnudo*》<sup>(註12)</sup> というような場合と、*durar* を意味し、アクセントを *o* におき *duró* となる場合とを区別していないからです。ここではあなたの言ったことが当てはまるかどうかを見きわめるには、アクセントの位置を考えてみる方がいいのです。

C. なるほどね、私間違っていましたね。

P. そうすると、マルシオ氏も間違っていますね、つまり *tresquilar* と *desquilar* とが同一の意味を持つと考えているのですから。

M. それで私が間違っているというのなら、あなた正しいところを私に教えて下さいよ。

P. よろしい分かりました。つまりですね、*trasquilar* は「髪の毛を切る」という意味以外には用いられず、この意味では《*Trasquílenme en consejo, y no lo sepan en mi casa*》<sup>(註13)</sup> や《*Ir por lana y bolver trasquilado*》<sup>(註14)</sup> のような諺に使われています。しかし、*desquilar* の方は家畜に関して使われることばなのです。したがって、この後者をその使用面ではっきりと区別を付けない人がいるとしたらその人は間違いを犯すことになりますが、ここが問題なので、あなたはその単語を *t* で書く人もあれば *d* で書く人もあると言ったその時点で間違いをしでかしたことになりますね。いいですか、字母が変わればその単語の意味も変わってくるのですからね。

V. パチエコ君が十分にあなたの間違いを正してくれましたね、おや、マルシオ君、あなた少し恥ずかしそうですね。

M. そう、おっしゃる通りです。私は言い負かされること、特に人を言い負かすような能力のない人にやられるなんて本当に癪にさわるのですから。まあこれはともかく、あなた様に *turo*

と書くか duro と書くか、どちらがいいと考えられるかをお伺いせずにおきたくありませんので、この点ご意見お聞かせ下さい。

V. それらの単語が同じことを意味するときには、コリオラノ君が間違っただと同じ間違いを読む人にさせないためにも、turó とするのがいいのではないかと思います。しかし、日常一般の話し方では duró と言われているのでね、私はまた最終音節に短い線でアクセントを付けて、duró と書くこともあるのですよ。

M. それはそれで結構です。ですが、いくつかの単語で沢山の人が s を使っているところに、あなた様は何故 x を使われるのですか。

V. その単語とはどんなものでしょう。

M・沢山ありますが、そのうちいくつかを挙げてみましょう。例えば、cascar と caxcar, cáscara と cáxcara, cascavel と caxcavel, ensalmo と enxalmo, sastre と xastre, sarcia か xarcia, siringa と xiringa, tasbique と taxbique のような場合です。<sup>(註15)</sup>

V. よろしい、それで十分です。あなたの言わんとするところははっきりとしましたから。さて、もしあなたがこれまで十分の注意を払って見てきたとしたら、あなたの言うように私はそれらの単語全部を x で書いてはいないのが分かるはずですよ。という理由は、この種の名詞においては私は次の規則を常に旨として守っているからなのです。つまり、それらの語がラテン語から入ったものなら s を用いて書き、xastre ではなく sastre, enxalmar ではなく ensalmar, xiringa ではなく siringa とし、もしそれがアラビア語から入ったと思えるような場合には x を用いて、caxcavel, cáxcara, taxbique などと書くということなのです。なぜこうするかその理由は、もうすでに皆さん方にお話ししたのですが、アラビア語の単語や部分的にアラビア語の要素をもつ単語には x はつきものだという事だからです。

M. そうすると、私たちはラテン語から派生したものと考えられるような単語には s を使い、アラビア語起源のものと思えるものには x を使っているということでしょうか。

V. もうあなた方にお話ししたのですが、私はいつもそうしているのですよ。私の考えるところ、あなた方が私と同じようにしても決して間違いを犯すことにはならないでしょうね。

M. しかし excelencia, experiencia などのように ex で始まるラテン語起源の名詞から x を取り去るようにと私たちにおっしゃるお積りではありませんでしょうね。

V. 私はその x を発音しませんので、いつもそれを取って、そこに s を書くことにしていますのです、というのはその x はカスティリア語にはなじまない字母ですからね。こうすると、ラテン語の綴り法に逆らうことになりますが、これは、私がカスティリア語で物を書こうとする時に目的とするところは、なにもラテン語にならうことではなく、可能な限り、カスティリア語の分かる人みなに私の言わんとすることを十分にくみ取ってもらえるように、こちらの気持を説明することなのですからね。

P. 正直なところを言わせていただきますと、そのお考え私には少しばかりむづかしく思えま

すが。

V. なぜですか。

P. なぜかといえば、あなたが何の資格でラテン語から x を取り去り、これに代えて s を使おうとされるのが理解出来ないののでしてね。

V. あなたは通常の発音の慣習以外に何の基準がいると言われるのですか。私の見るところ、あなた *experiencia* とは書いても *exemplo* という場合と同じようには x を発音していないのですからね。

P. それはそうですが…

C. でも私としてはあなた様がその発音の仕方に従ってしか綴りを書かないのだと、そんなに強く主張されることにどうも我慢出来ないのです。

V. なぜですか。

C. なぜかという、あなた様、常にそうされているとは限りませんからね。

V. どこでそれと違ったことをしていますでしょうか。

C. あなた様 r を使って *vuestra* と書かれている場合のことですよ。私にはあなた様が *vuessa* と言われて s としてしか発音されていないように感じとれますが<sup>(注16)</sup>

V. それは私が *vra.* として省略形を書く時のことでしょうね。というのは略字は r で書くのが習慣になっていますからね。しかし私がそれを完全な形で書き表わさねばならない時には s 以外は使っていませんよ。この省略形と完全な形との間にたいていの場合このような差があると考えてもらっていいのですが、いつもこうだとは言いきれません。というのは、もし *vra. m.* とあるところの *vra.* を私が r で発音したとしたら、この発音を耳にしたイスパニア人なら誰もが私を外国人だと思うことでしょうが、しかし *vra. s.* とあるところの *vra.* を r で発音しても誰も私を外国人とは思えないと思うからなのです。この点はっきりしていることは、通常の発音はすでにあなた方も気付いているように、r を外しているということなのです。<sup>(注17)</sup>

M. 私はこれまでそういう点に気が付きませんでしたし、また *vra.* と r で書いてあるのを見ていましたので、そのように r で発音すべきものとも考えていたのです。しかし、あなたのお話しの通りですので、今日からは s でだけそれを発音することにします。でも人を戸惑わせるような略字を使われるのはよくないように思えますね。

V. その略字はなるほど紛らわしいですが、これはカスティリャ語を母国語とする人には何の差障りにもなっていませんし、またラテン語を知っている人が、*xpo.* という略字を書いて、x も p も発音しないことがあります。これがそういった人たちを戸惑わせることもないのですからね。<sup>(注18)</sup>

M. あなた様のおっしゃる通りです。さて、これはこれとして次に、あなた様が普通 z で書かれている多くの単語を、z で発音もせずまたこの字母を書きもしないイスパニア人がいるのですが、こんなことがどこから生じたのかお話し下さいませんか。

V. それはね、あの z の少しばかりかすれた発音をしようとせず、その z の代りに s を使って、hazer に代えて haser, razón に代えて rasón, rezio に代えて resio などという人たちの話し方に現われる間違った発音なのですよ。<sup>(注19)</sup> どうです、この私その気になれば bachiller en romance (俗語の先生) として立派に通ると、またこのようにことばについていろいろ bachillerías (講釈) をしてそれで食っていけると思いませんか。

M. 勿論、言うまでもないことですよ。

C. またお気に障ることも知れませんが、その bachiller の意味と bachillerías はどんなことを指すのか私にお教え下さいませんか。

V. Bachiller と bachillerías の意味が分からないというあなたに私本当に驚いてしまいますね。私の国ではまだ歩くのもおぼつかない子供でも十分にその意味を知っているのですからね。

C. 勿論、私の国でも乳飲み子でさえあなたの知らない単語を知っていることもありますからね。

V. そう、あなたの言う通りです。Bachiller はカスティリア語ではラテン語の baccalarius と同じ意味を持ちます。

C. それでよけいに分からなくなりましたね。あなた様は私の知らないことばを使って、私の分からないことを説明しようとされるのですか。

V. Bachiller とか bacalarío は後日に時間をかけ研究をおこなうことで学士、博士、専門家になると目される人々にイスパニアの大学で与えられる最初の学術称号なのです。ここに挙げたような学者たちは、普通によく、本当に知っているよりもなおそれ以上に学があるような様子をするものですから、誰か人が知ったかぶりをすると、その時にはその人を bachiller と呼び、そういう言動を bachillerías と呼ぶのです。これで分かってもらえたかな。

C. ええ、それではっきりしました。

M. その bachiller とかは少しばかり置いておいて、この我々の問答にびったりな問題に話しを移すことにしたら如何ですか。さて、最初にあなた様がおっしゃいましたが、カスティリア語はラテン語のアルファベットに加えて、トスカナ語の gi の価値をもつ長い i (=j) と c の下に付けて z のような音を出させる符号のセディリア (cedilla), また n の上に付けてラテン語とトスカナ語の g と同じ価値を示す働きをする波形符号をもつようです。如何でしょうか。これらの字母や符号について観察されたところをお聞かせ願えませんか。

V. g についてはお話し出来ることを全部あなた方に申したと思いますよ。

P. そうでしたね。

V. セディリアとって、いくつかの単語で c の下に付ける小さな符号のことですが、私はこの符号の付いた c は、昔は z とまったく同じものだったのじゃないかと考えているということを申しておきたいのです。

M. そのお話し、どうもそのままには受け入れられないですね。あなた様、時の経過が岩をう



がつように文字をも削り取るとおっしゃるお積りなのですか。

V. 仲々うがったいい方をするのですね。時の経過が文字を削り取るなんて言う積りはないのでして、人間がその不注意から、時の経過と共にそれらの字母を削り取るのだと言いたいのですよ。大切なことは、c がその後に a, o, u を従えていて、çapato, coração, açúcar のように、声がすれたような音<sup>(注20)</sup>になるべき場合にこれを使うのだということなのです。

P. すると、c が e や i と合わさって、cecear や cimiento となるような時には、このセディリア符号を付けるべきではないのですね。

V. そうです。付けるべきではありません。

P. なぜですか。

V. なぜかという、そのセディリアを付けても付けなくっても、常にそれらの単語、それに類するものと同じ音で発音しているからなのです。つまり、セディリアを外せるのですから、これを付けるとかえっておかしくなるでしょうね。

P. そうですね、お話しごもっともです。私も今後はそのような場合にはその符号を外すことにいたします。

C. そのセディリアとか呼ばれている符号ですが、どのような場合に、そういった字母の下に付けるのか、またどんな場合には付けられないのか、どうして私は見分ければいいのでしょうか。

V. 発音そのものがあなたにそれを教えることになりましょうね。

C. すると、正しく単語を綴るためにはまず発音を正しく覚えることが必要になりますね。

V. 勿論ですよ、言うまでもありません。例の波形符号は、通常カスティリア語ではラテン語の綴りと同じ働きをしますし、特に n の上に付すと、ラテン語やトスカナ語で g が n の直前にきた場合の g の音を示すことになります。ですからラテン語が ignorancia と書くところをカスティリア語は iñorancia とし、トスカナ語が signor と書くところをカスティリア語は señor とするのですよ。

P. しかしあなたが何もかもご存知だとお考えになってしまわれぬように、こちらとしても私の観察の鋭いところを披歴して、次のことを申し上げたいと思うのです。つまりその波形符号の n に及ばず働きは他のものが別の字母に対しなす働きと何ら違ってないし、また違うはずもないということですが、こういうのも、この字母 g の場合には他のいろんな字母の場合にも当てはまるように、n の代りをするようになっていますが、しかしこうなると n が 2 個続いてしまうのでこの 2 個の連続音の表わす冷やかな音声を避けるため、その一方が g となり、これであなた様が聴かれるようなあの音が出来たと思うのですよ。

V. その考え方悪くはありませんね。

P. これについてもうひとつ考えることですが、現在私たちが波形符号を使って mañas というのは maneras と同じではないかと思うのです。ただひとつ違う点はこの二つの単語が例の波形符号をもつかどうかということだけですが、こういうのは、あなた様もご承知のようにこの

maneras を省略して書くときにはそれを mañas のように書いているからなので、これは《El que malas mañas ha tarde o nunca las perderá》<sup>(註21)</sup>というのと《El que malas maneras ha...》とするのと同じことではないかと私考えるからなのです。同じようなことが daño と año やその他のいくつかの単語にあったのではないかと考えるのですが、これらの単語では、例の符号はまずラテン語で dañum とか añum とかいった場合の音を表わしたのですが、その後それを別の音で発音するようにしてしまったがため、その符号が初めは n か m の代用として働いていたのに、時が経つにつれて n の上に付すと g の役目をするという風が変わってしまったともいえるでしょうね。

V. そのようなきざなことを言いたてることで名が上がるというのなら、あなたは今言ったことだけで、これまでいろいろ話してきた私よりもずっと大きく名を上げたことになったでしょうね。残念ながら、私としては、あなたの言ったような立派なことをこれまで考えてみたこともなかったと申しておきたいですね。

P. さてとこの私の考えあなた様にお認めいただいたことですので、これまでは別に立派なこととも思っていないかったのですが、今後はそう考えさせてもらうことにいたします。それに加えて、私が良心的な人間であって他人の持ちものをまるで自分のもののようにして売りつけるような者ではないとご承知いただくために、ここに申したことは私が考え出したのではなくて、その名前は誰かのお気に障るといけませんので申し上げずにおきますが、我々皆の知っている人から習い取ったものであることを申しておこうと思うのです。

V. 私はその鋭い見方があなた自身の創意から生れたということにまったく驚いていたのですが、しかしあなたは文字の欠落などは十分立派に読み取りうるような才能のある人だと思えますので、なおさらその見方があなた自身のものであると思って疑わなかったのですよ。

M. お二人の交されているイスパニア人的な儀礼の数々は、そんなことを言ったり、したりして嬉しがっている人々に任せておいて、como と muy との上に付したその波形符号はどのような役目になるのかお聞かせ下さい。

V. それはまったく書法上の飾りにしかすぎませんね。

M. O の直前に書く短い線はどうですか。

V. それも同じように飾りですね。

M. すると、それを書かない人があってもそれで文意を損うということはありませんね。

V. ええ、絶対にそういうことはありません。

M. あなた様がいくつかの単語の上に書かれる短い線ですが、それはギリシア語やトスカナ語で使われるのと同じ役目をしているのですか。

V. そうです。つまり、そこに母音がひとつ省略されていることを表わすための符号でして、この母音は前にくるか、後にくるかするもうひとつの母音と連続するので削除されてしまったのですよ。

M. すると、なぜ皆がその短い線の符号を使って表記しないのでしょうか。

V. その理由は当然行なってしかるべきことに皆が正しく注意を払わないからということでしょうね。

M. ではその符号を使わぬ人たちはあなた様が省略された字母を、表に書き出していないということになるのですか。

V. 実際は、皆がそれを見落している訳でもないし、また全部そういった場合の字母を略してしまっているということでもありませんね。

M. すると、それらの字母を省略する人はその略した字母を例の短い線で表示しているのですか。

V. いいえ、皆の人がそうはしているとは言い切れませんね。

M. なぜなのでしょう。

V. 私の思うところ、私がギリシア語やイタリア語をよく知る前のことを思い起すとそれと同じで、あまりそのようなことに注意が行かないのですね。しかし、もしあなたの方でよかったら、このようなあまり役に立つとは思えぬ話は止めにしたらどうでしょう。

M. なぜ、役に立たぬ話なんておっしゃるのですか。

V. というのはね、こんな話は片方の耳から入って、もう一方の耳から抜け出てしまうようなたぐいのものなのですよ。

M. いやいや、もしあなた様がそのようにお考えならまったく思いちがいをされていますね。というのは、断言してはばかりませんが、あなた様がこれまでお話しになった大事なこと全部をここで今繰り返し申し上げられたら、私の気持もどれだけ晴れ晴れすることかお分かりいただけないのが残念ですね。

V. いやあなたそんなことをしても大したことにはなりませんよ。というのは、こんな話では大切なことなんて爪に書き込めるほどに僅かなものでしょうね。

M. あなた様はそんな風におっしゃいますが、本当は別のお考えをお持ちだとのこと、私はよく存知上げていますからね。

V. 私の言うことを信じてくれないのなら、お好きなように思ってくれるしかありませんね。ではあなたのお尋ねとかをどうぞ。

M. ではおっしゃるようにいたしましょう。さて、私たちあなた様のお手紙の中で気付いたことですが、いくつかの単語で人が en を使っているところにあなた様は a と書かれています。

V. その単語とかを二、三挙げてくれませんか。

M. つまり人が、envergonçar, enhorcar, enriscar としているのに、あなた様は avergonçar, ahorcar, arriscar とされている場合のことですが。

V. 私はそれらの単語が en で書かれているのをこれまで見たことはありませんが。

M. でも私は見たのですから。

V. どこで見ましたか。

M. Librixa のものです。

V. ああ、また Librixa の話になりましたね。もうあなた方に何度も言いましたが、その Librixa はカスティリアの人ではなく、アンダルシアの人間ですので、カスティリア的な話し方、書き方ではなくアンダルシアの言い方、書き方になるということ覚えていませんか。

M. それはもう私にもお話し下さったことで、よく承知はしております。しかし、私もあなた様に何度も申し上げたことですが、少なくともあと十回ぐらいはあなた様に Librixa のことを申しますので、ご不満でしょうが彼の考えに対するお考えをお話しただかねばなりませんね。

V. これはまあ辛抱のいることですな。

M. またあなた様は *encentar* という単語では *en* に代え *de* を使い、*decentar* とされていますが。

V. ええ、私はそうしていますが、それは *en* よりも *de* の方が私にはいいと感じられるからです。また、同じ理由から、よく人が言っているあの *infamar* や *difamar* という形はいいとは思えないのですよ。ほかに *disfamar* という人がありますが、私はこう書くのがいいと思いますのでね。

M. その点については、あなた様と私とはまったく見方が一致しますね。しかし、*en* と *de* とではどちらを使うのがいいとお考えかお教え願いたいと思いますが、つまりこれと同じような場合には *de* はよろしくないとお考えなのか、それとも *en* がよろしくないとお考えなのかということなのですが。

V. 私の見るところ、多くの常識ある人たちは *de* を使っているようですが、私としては *en* とするのがいいように思うのです。なぜかというと、*de* の働きはその場合に皆が持たせたいと考えている意味を表わすことにはならないように思えるからで、これに反し、*en* の働きは正にその意味ぴったりですから、当然のことながら、*de* をその場から放逐することにもなるのですよ。

M. この点についてのお話しごもっともだと思います。さて、忘れないうちにお尋ねするのですが、単語の始めにくるこの音節 *des* はギリシア語の *dis* と同じ働きをしているのかどうかお聞かせ下さい。というのはあなた様もご承知のように、殆んどの場合その接頭辞は単語の意味をいことから悪いことの方に変化させてしまいますね。

V. これまで私はそのことに注意を払って見てきましたが、それら *des* と *dis* との間には大きな共通性があると考えています。というのも、*amparar* と *desamparar* として、《*No haze Dios a quien desampara*》<sup>(註22)</sup> と言い、*esperar* と *desesperar* では《*Quien espera, desespera*》<sup>(註23)</sup>、*amar* と *desamar* の場合、《*Quien bien ama, bien desama*》<sup>(註24)</sup>、*atar* と *desatar* では《*Quien ata [bien] desata*》<sup>(註25)</sup> と言っていますし、その他に *desgraciado*、*desavergonzado*、*desamorado*、*descuidado*、*desordenado* などがあって、これらはみなよろしくない方の意味を表わしていますからね。

M. そのお話し仲々の鋭い見方ですね、また挙げられた単語そのものも品のいいものですしね。お手許に沢山こういった単語をお持ちですか。

V. ええ、沢山ありますよ。

M. ときには prestar と言っているかと思うと、また別のときには enprestar と言っているようにも思うのですが、どちらがいいとお考えですか。

V. enprestar は下品なことだと思いますよ。

M. でも二つのうちでより安定した形になっていると思われませんか。

V. そうかもしれませんがね。

M. すると、mostrar と demostrar とではどちらがいいとお考えですか。

V. 私はその de が余計で下品なものだと思いますので、mostrar を使うのです。

M. すると、同じような理由から、あなた様は estropear や escomençar のような単語から es を外されないといけなくなりますね。

V. 正にあなたの言う通りでして、その理由で私は es を外すことにしています。またあなた方に私がしまつ屋でけちな人間なので、あなた方の尋ねたことにしか答えないと思われるのも癪ですから、次のことだけは言っておきたいと思います。つまり、カスティリア語は常にラテン語の in を en に変化させましたが、例えば、invidia を embidia と言ったり、incendere を encender, incurvare を encorvar, inimicus を enemigo, infirmus を enfermo, inserere を enxerir にするような場合ですが、これ以外に多くの単語を挙げることが出来ます。これと共に、あなた方に知って欲しいのは、常にそうだと断定しえないですが、しばしばラテン語の in が落ちるように、カスティリア語の en も、常にそうなるとは限らないが落ちることが多いのです。この話し満足いただけましたかな。

M. ええ、本当に結構なご説明です。さて、次にはあなた様が re で単語を作られるときのこと、これはその意味を強められるためか、それとも他の目的からなのかお話し下されば有難いのですが。

V. Reluzir といって、「luzir の程度を高める」という意味になる場合のように、その元の意味を強めることになることもあります。しかし、どんな場合にも reluzir を使っていいかというところではなくて、《Al buey maldito el pelo le luze》<sup>(注26)</sup> という諺で 《...reluze.》とするのはどうもびったりしないようです。かと思うと requebrar のように意味が変わってしまうことがあります。こうなると quebrar とはまったく違うものなのです。traer の場合にもことは同じで、これは retraer とはまったく別の動詞なのです。この retraer は、時にはイタリア語と同じ意味を表わすことがあり、この意味では asacar と人が言うのを聞いたことがあります。私としてはこの単語は使いませんね。また、この retraer を escarnecer に代えて用いることがあります。これは私の思うところ、だれか人の肖像画を描こうと意図するときには、その人本来の姿形を真似ることになるのですが、これと同様、だれかを馬鹿にしようとする場合にはその人の言葉づかいや身振りを真似て、それで相手を傷つけようとするからかもしれませんね<sup>(注27)</sup>

C. しかし私はあなたがそのように音節のところを、通り一遍の話だけで済まされるのは不満なのですが。

M. 君のいうことよく分かりますよ、でも私は何を取り上げたらいいかその材料も見付からないので、すでに実を摘み取ったあとのぶどう園を歩いているような気持でして、今は語彙という実の成っている若木のぶどう園に入りたく思っているのですよ。ですから、もしあなたが私にご同調下さるのなら、質問を始めたいのですが。

V. あなたとご一諸出来るのなら、私が入って行くのが嫌だというような場所はありませんよ。ですが語彙の点では、もしあなたがしっかりと覚えてくれているとしたら、私としては言うべきことは全部お話ししたはずですが。

M. いつのことでしょう、それは。

V. カスティリア語は、くずれたものや完全な形で残っているものもありますが、主にラテン語と、これに加えモーロ人のことばのアラビア語と僅かのギリシア語から成立しているとお話したときのことですよ。

M. ああ、思い出しました。しかしもっとお話しいただく必要がありますので、詳しいところをお聞かせ下さいませんか。

V. これ以上の話としては次のようなことになります。つまりこの点をよく考えてみると、カスティリア語がラテン語から取り入れた語彙の大部分は人々の間でもっともよく用いられ、また人間の生活にもっとも密接な関係のあった事物に関するものであること、アラビア語から入った語彙というのは特異なもの、つまりさほど必要でないものや、いやしい卑俗なものに関する場合で、これらの単語を私たちはそれが表わし、意味する事物と一諸に取り入れたのでした。他方、ギリシア語から入ったものは、その殆んどが宗教や学問に関連しているのです。ですから、あなた方がこの点をよく注意してみたら、今言ったことががおおむね正しく当てはまることに気付くだろうと思いますよ。

M. いやいや私たちとしてはあなた様がそうおっしゃるだけで十分です。こう申しますのは、あなた様もご承知のように、正しく話し書くことを知るための最も肝要なことは、我々の使う単語の素性と本性とを見きわめることにあるのですし、また私の理解するところでは、カスティリア語にある沢山の単語のうち、いくらかのものは時の経過と共に古くさくなってしまって今では使われなくなっているのですからね。

C. あなた今なんと言いましたか、単語も年をとるのですって。

M. 勿論そう、年をとりますよ。それでもし私の言うことが信じられないようなら、それをオラシオの著わした「詩論」で確かめてみたらいいのですよ。<sup>(註28)</sup>

C. そうですか、分かりました。

M. それに、ある種の単語はひびきが悪いということで使われませんが、この代りに、正しい言葉づかいをする人たちは別の単語を取り入れてきているようです。この点でも私たちが間違いを犯すことのないように何らかの注意を我々にご教示下さるようお願いしたく思うのですが…

V. その問題ではあなたの言に従う積りはありませんね、というのは、あなた方にも分かるよ

うに、私はどうしても私の手紙のことをあなた方に説明せねばなりませんのでね。

M. なる程あなた様にはこれまで私たちの質問にいろいろお答え下さるようご無理をお願いしました。ですから今は無理やりにそういった単語のことをお話し下さいというのも心苦しいのでして、むしろご好意にすがってお願いする以外にはないようですね。

V. あなたの丁重さを前にしては、私は約束以上のことをせねばならぬようになってしまうじゃありませんか。さてそのことについてですが、私が書いたり話したりするときには、思いつくもので最もいい単語を使い、不適切なものは常に除外するように心掛けていることをご承知下さい。ですから *acucia* とは言わずに *diligencia* という訳です。《*So el sayal ay ál*》<sup>(注29)</sup> 《*En ál va el engaño*》<sup>(注30)</sup> などのようにいっていますが、私は *otra cosa* といえる個所ではもう *ál* は使いません。*asaz* は使わず *harto* としますし、*adufre* ではなく *pandero* を、*abonda* ではなく *basta* を、*ayuso* ではなく *abaxo* を使うことにしています。また *entramos* や *entramas* に代えて *ambos* や *ambas* を使う人もありますが、私はこれを使っていません、というのは、こちら後者のものが前者よりもラテン語によりよく合致したように見えるのですが、事實は、*entramos* や *entramas* の方がよく使われているし、こちらの方がよりよい単語という見方がなされているからなのです。昔は *tenga, tengas* に代えて、*aya, ayas* と言っていましたし、今でもこれを使う人があるようですが、これがぴったりと当てはまる場合はごく僅かしかありません。例えば、《*Bien aya quien a los suyos se parece*》<sup>(注31)</sup> とか 《*Adondequiera que vayas, de los tuyos ayas*》<sup>(注32)</sup> のような場合はいいのですがね。次ですが、あまり頻繁には使いませんが、*aventurar* よりも *arriscar* の方を私はよりよい単語だと考えていますが、残念ながらこの *arriscar* と同様、私の好きな *apris-car* をも田舎語から来たものとして私たちはもう捨て去ったと考えていいですよ。これら2語は本当に私の好きな単語で、次のように、《*Quien no arrisca, no aprisca*》<sup>(注33)</sup> として諺に用いられているのです。ラテン語 *ecce* の意味を持つ *ahe* を我々がなぜ捨て去ったのか、それを補う他の単語がないものですから、そうなった理由が私には分からないのです。*Venturas* から私たちは実にすばらしい単語を造り出しましたが、私はこの単語には、深い敬意をも抱き、大きな共感をも感じておりましてね。その単語とは *aventurar* で、これは《*Quien no aventura, no gana*》<sup>(注34)</sup> として諺に使われています。この *aventurar* から「幸運を求めて行く人」を意味する *aventurero* が生れていますが、この単語は日常使う通俗語で書かれた空想物語の中に一杯に溢れているのです。次に、*artero* という単語が使われていないのが私には残念ですが、こういうのは、皆さんもお分かりの通り、実にいい単語で、《*A escasso señor, artero servidor*》<sup>(注35)</sup> とか 《*De los escarmentados se levantan los arteros*》<sup>(注36)</sup> のように諺にも何度も用いられているのですからね。また *arregostar* をも使わなくなりましたが、これも私は残念で仕方ありません。《*Arregostóse la vieja a los bredos y ni dexó verdes ni secos*》<sup>(注37)</sup> として諺には使っているのですから。*Aleve, alevoso, alevosía* も私には実にすっきりとした単語だと思えるのですが、今ではあまり使っていないのが私には不思議ですね。

M. それらの単語を昔は使ったのですか。

V. ええ、とってもよく使いましたよ。もしあなた方少し思い出してみれば、どこかの本でそれらのことばを読んだと思ひ当ることでしょうし、《A un traidor dos alevosos》<sup>(註38)</sup>という諺もありますよ。

M. Alevoso とはどんな意味ですか。

V. Traidor と同じことじゃないかと思ひますね。Esperar に代えて atender とはもう言いませんが、次の諺に見るように、つまり《Quien tiempo tiene y tiempo atiende, tiempo viene que se arrepiente.》<sup>(註39)</sup>として、かつては使ったのですよ。この atiende と atender とは今でも詩によく使われますが、私自身散文ならもう使いませんでしょうね。

〔続く〕

(Juan de Valdés, Diálogo de la lengua; Clásicos Castellanos, No.86; 83ページ22行～107ページ5行)

〔註記〕

- (1) Duro es el alcacer para çampoñas: “麥は麦笛を作るには堅い”とは、人が新たに習いごとなどを始めるのには年をとりすぎたという意味を表わすための慣用句で、現代語では、estar ya duro el alcacer para zampoñas として残っている。
- (2) A pan de quinze días, hambre de tres semanas: “2 週間のパンに 3 週間の飢え”とはどんなまずいものでも空腹時にはおいしく感じられることを教えた諺。
- (3) Valdés が排除している形、即ち, entonces, así, dende は Nebrija の Vocabulario に見られる。
- (4) Nebrija は invierno を挙げていますが, lenxos は見られない。
- (5) この ph は18世紀, Academia Española の設立時まで存続した。
- (6) ここでは特に母音間の有声音(—S—)と無声音(—S S—)との対立が問題となっている。中世イスパニア語及びこれに次ぐ16世紀のイスパニア語にあっても、現代カタルーニア語の roser, casa にみられる有声音[z]が存在したが、この区別が除々にあいまいとなっていることが、この問答からも読みとれる。この16世紀の記録では、同一の語においても有声音が無声化する過程が, eso と esso, grosero と grossero などの綴りからもうかがえるとされている。
- (7) 中世イスパニア語ではこの区分があったと考えられるが, asperar についての記録は比較的に少ないようである。cf. Todos oreia ascucha estauan asperando / Qué faularía el rey que estaua callando. (Libro de Alexandre, 6815)。
- (8) Un padre para cien hijos, y no cien hijos para un padre: “百人の息子には一人の父がいるが、一人の父親には百人の息子も及ばない”とは、父母の子供への愛情の深さと、これに対する子供の恩知らずな気持とを言い表わすための諺。
- (9) この—tt—はラテン語の—ct—を同化したイタリア語に独特のもので、これがイスパニア語にも取り入れられたと見做される。これは特に15世紀に Santillana などによって好んで用いられた形であった。



国語問答

ホアン・デ・バルデス (中岡)

- (10) *turar* (=durar) は, Santillana, Lazarillo, Garcilaso によっても用いられた形である。
- (11) ここでは形容詞 *duro* (固い) を比喩の意味に使って, 《*Del escasso no se saca más çumo que de una piedra*》となっている (テキスト, 88ページ)。
- (12) *Más da el duro que el desnudo*: “裸の者よりもけちな者が沢山与える” とは, どんなにけちな人からでも, 一文なしからよりはものを引出す可能性があることを教えた諺
- (13) *Trasquilenme en concejo, y no lo sepan en mi casa*: “市会の中で私の毛を刈って, 家にはそれを知らさないでくれ” とは 公衆の面前で評判を落した人が, 家や親戚の人々にそれを隠そうとすることの馬鹿さ加減を皮肉った諺。
- (14) *Ir por lana y volver trasquilado*: “羊毛を取りに行つて, 毛を刈られて帰ってくる” とは, 「みいらとりがみいらになる」こと。
- (15) これらの単語のうち, *cascabel* [ <<sup>#</sup>*cascabellus* <*cascabus* (lat.) ]; *cáscara* [ <<sup>#</sup>*quassicare* <*quassare* (lat.) ] はアラビア語源ではない。
- (16) *vester* (l.c.) > *vöster* (l.v.) > *vuestro*; この場合の *-str-* がイスパニア語で *-ss-* と変化することもあった。 *nuesso, vuessoo, maesso* となる場合であるが, これは現代語には残っていない。
- (17) *vra. m.* には *vuessa merced* が, *vra s.* には *vuestra señoría* が夫々完全形として対応するものと Valdés は考えているようだ。
- (18) *Xpo.* は「キリスト」を意味する略字。
- (19) ここは *seseo* についての言及がなされている。特にカタルーニア, バレンシア, バスコ地方の *seseo* を言ったものであろう。
- (20) テキスト (94ページ) には形容詞 *espeso* (cfr. “*Esposo llamamos al que no es limpio*”, Covarrubias) が用いられている。Valdés はこの形容詞を無声音 [s] を意味するのに用いたが, ここではもう少し幅広く, [ts] を意味するものと思われる。cf: *Como la sorda les sonaba* (=a los castellanos) “*con sonido entero*” y la sonora “*con medio sonido*” “se reservó para la sonora el único signo gráfico disponible s, y se ideó representar el sonido entero (o espeso o apretado) duplicando la letra ss.” (Amado Alonso, *De la pronunciación medieval a la moderna en español*, t. seg., pág. 7)
- (21) *El que malas mañās ha, tarde o nunca perderá*: “悪い作法を持つ者は, それを失うのに時間がかかるか, それを決して失うことがないかのいずれかだ” とは, 悪習がつくとこれから脱れるのは困難であることを教えた諺。
- (22) *No hace Dios a quien desampara*: “神は見捨てて人を作られない” とは, 神の恵みは等しく万人に及ぶことを教えたものか?
- (23) *Quien espera, desespera*: “待つ人は絶望する” とは, 物事にはあまり大きな期待をかけるなと教えたものか?
- (24) *Quien bien ama, bien desama*: “こよなく愛する人は, ひどく嫌う” とは, 愛憎の感情は同じ程度に大きいことを教えたものか?
- (25) *Quien ata bien desata*: “うまくしばる者は安心する” とは, ある仕事を十分な準備をもって始める者は成功疑いなしと教えた諺。

- 26) Al buey maldito el pelo le luze:“呪われた牛には毛並が光る”とは、「憎まれ者世にはびこる」の意。
- 27) ここでは retraer は retratar:「肖像画を描く」の意味で用いられると考えられる。
- 28) Horacio (65－8 a.de J.C.) の詩論 (versos 60－61) に, “ut silvae foliis pronos mutantur in annos.—prima cadunt:ita verborum vetus interit aetas”(森が年月を経て木々の葉を変えるとときに, 最初の葉が落ちるように, 古い言葉もその古き命を終える) とある。
- 29) So el sayal ay ál:“ラシャ地の下に何がある”とは, 物事を表面に出たことだけで判断してはいけないと教えた諺。
- 30) En ál va el engaño:“別のことの中に偽りがある”とは, 用意周到な準備をした結果得られたような成果なんて, あまり自慢にはならないことを教えた諺。普通は, En al va el engaño que no en besarla durmiendo と言うらしい。
- 31) Bien aya quien a los suyos se parece:“身内の者に似たる者に幸あらんことを”とは, 不行跡などをしてかして家族の者たちに迷惑をかけてはならぬことを教えた諺。
- 32) Adondequiera que vayas, de los tuyos ayas:“何処に行こうとも, お前がその友を持たんことを”とは, 類は類をもって集まることを教えたものか?
- 33) Quien no arrisca, no aprisca:“危険を冒さぬ者は家畜を囲い場に入れない”とは,「虎穴に入らずんば虎児を得ず」にあたる。
- 34) 33と同じ意味。
- 35) A escaso señor, artero servidor:“けちな主人には, 狡い召使い”とは, 人を使うときなどあまり金銭的な面でけちくさいことをすると, 大きな痛手をうけることがあると教えたもの。
- 36) De los escarmentados se levantan los arteros:“懲りた者の中から狡い者が立ち上がる”とは, 苦勞して人間は少しづつ賢くなってゆくものだ と教えた諺。
- 37) Arregostóse le vieja a los bredos y ni dexó verdes ni secos:“老婆がつまらぬことに興味をもって, 緑の草も枯れ草も残さなかった”とは, 年寄りの冷や水的な行動をいましめたものか?
- 38) A un traidor dos alevosos:“裏切者には二人の背信者”とは, 背信的な行為をなす者は絶対に信用されないことを教えた諺。
- 39) Quien tiempo tiene y tiempo atiende tiempo viene que se arrepiente:“時があるのに時を待つ者は, 後悔する時が来る”とは, 一度あった機会を利用せずに次の機会を待つようなことは決してするな と教えた諺。